乱歩の旅行：昭和一〇年～一一年、九州放浪の旅

王　羽　萌

一九三五年（昭和一〇年）の十二月、江戸川乱歩は東京を去り、ふらりと九州の地を訪れた。のちに乱歩がこの時期の出来事を振り返っていく中で、この九州旅行を「いつもの逃避放浪旅行」として性格づけていた。「九州一周旅行」は一九三五年一二月から翌三六年一月の半ばまでで、約一ヶ月半にわたる旅行であった。その間に、乱歩は博多、熊本、長崎、鹿児島、別府などに泊まり、中でも「長崎と別府に一番長く滞在した」と後年『探偵小説四十年』で語っている。約一ヶ月半にわたるこの放浪旅行に対して、おそらく仲の良い編集者か作家仲間と思われる人物が一九三六年七月一二日号『週刊朝日』のコラム「作家噂話」で名前を伏せて、乱歩の「旅行奇癖」について記事を書いている（乱歩はのちにこれを『貼雑年譜』に大事に貼って保存していた）。その記事の記述によれば、乱歩は「市中を散歩していて、気が向くとそのまま ブラリと上野なり新橋なりから汽車に乗り込んでしまう」ことがあり、「全くの素手で」「飄然と出掛けてしまう」。しかも、乱歩から電報をもらい、何事かと思えば、遠い長崎からの「カネオクレ」であったからびっくり仰天したという。ここからも乱歩の放浪旅行の様子が大概窺えるであろう。

乱歩のこうした「逃避放浪旅行」は度々あって、観光地をぶらりと一人訪れることで、創作や対談、集会などに追われる作家生活から息抜きする。『探偵小説四十年』によれば、一九三五年、前年末までに手をかけていた雑誌の連載も終わり、当時執筆中の「人間豹」も同年四月に仕上げたという。乱歩はそれ以降新しい仕事の予定を入れずに、この期間を「作家生活以来三度目の冬眠」と呼んでいていた。この休筆の主な原因は、自分の創作に不満を感じたというよりは、同年五月に蓄膿症の手術を受けたという健康上のものであった。長い休養生活で乱歩は書くから読むに向けて方向転換し、本格探偵小説への情熱を再び燃え上がらせた。病気の休養、多忙な作家生活からの息抜きも兼ねて、「いつもの逃避放浪旅行」という形で心身のバランスを整えていたと思われる。そして、この九州放浪で訪れた別府がよほど気に入ったらしく、一九三七年四月に家族を連れて再び訪れた（この家族旅行の詳しい内容については、丹羽みさと「旅する乱歩～別府編～」を参照）。

さて、今回は乱歩が旅先から持ち帰ったパンフレットや葉書の資料を中心に、一九三五～一九三六年の九州放浪旅行について概観したい。三五年～三六年の九州旅行に対して、乱歩のおぼろげな記憶しかのちに記録されていないため、「逃避放浪旅行」の細かなスケジュールを全体的に再構成することは難しいといえよう。「トランク一つ提げるではなく、石鹸一つ用意するではなし、全くの素手」の乱歩は当然、家族旅行の時のようにカメラを準備して記録する態勢をとっているわけではない。乱歩が旅先から入手した葉書やパンフレットを合わせて参照すれば、彼はおそらく東京から列車に乗り、途中船に乗り換え、九州では再び鉄道を利用して周遊していただろう。彼の足跡に沿って資料をピックアップすると、「南洋の風土を偲ぶ・日向青島の奇勝」「長崎切支丹名勝案内」「青島村勢一覧」「鹿児島市パンフレット」「麗光（九州線第一輯）」（鉄道省・葉書）、「美しの山水（九州線第二輯）」（鉄道省・葉書）などがある（図1を参照）。

とりわけ、乱歩が「一番長く滞在していた」という長崎に関しては、大浦天主堂が一九三三年に発行していた『長崎切支丹名勝案内』（図2）がある。長崎はオランダや中国との貿易で栄え、エキゾチックな雰囲気にあふれた街としてだけでなく、バテレンの発展と弾圧の歴史で隠しキリシタンとキリシタン名勝が数多く残されている土地でもある。長崎は昔から文学者に愛され、特に近代以降は雑誌『明星』を創刊した与謝野鉄幹・明子夫婦を中心とする青年詩人たちの旅や、芥川龍之介の長崎来訪と彼の「切支丹物」と呼ばれた一連の作品がよく知られている。乱歩が訪れた時期は奇しくも長崎が観光事業を大いに力を入れていた時期であった。『新長崎市史』（長崎市史編さん委員会、二〇一四）によると、一九二八年三月、長崎の雲仙は内務大臣より名勝地に指定されたという。それがきっかけで、国立公園指定運動の流れに乗じて、長崎では観光業が造船、水産に次ぐ第三の産業として位置づけられ、振興の動きが強くなったという。

由緒ある観光地の阿蘇、別府と連携して、国内だけでなく、国際的な観光遊覧を誘致するブームが生じていた。乱歩旅行の前年の一九三四年三月二五日から五月二三日まで雲仙で開催された「国際産業観光博覧会」はこうした観光振興の気運をさらに高めた。乱歩がツーリズムブームの最中に長崎に訪れ、長崎の切支丹名勝及びその周辺にも足を運んでいただろう。さらに掘り下げれば、乱歩が長崎遊覧のちょうど一年前に、観光客誘致のために、既存の大村線など在来線を踏まえ、長崎では航路・鉄道・道路が整備され、当時日本でも屈指の交通システムを立ち上げた。これを利用して九州を周遊する乱歩の姿は想像に難くないだろう。今まで見てきた「いつもの逃避放浪旅行」であるこの九州放浪は、乱歩のその他の放浪旅行を考えるには良い素材を提供することもできると思われる。

年明けて一九三六年一月、乱歩は放浪を終え、九州を一周してから東京に戻り、再び執筆に集中するが、「イヤイヤながら続きものを二つ書きはじめた」と「意気上がら」ない三六年を迎えた。

翌月、二・二六事件が起こり、益々暗雲立ち籠める世間になった。実際、一九三七年盧溝橋事件の時期から、戦時中の旅行が少しずつ制限されるようになったと言われ、こうした放浪の旅もできなくなっただろう。長崎も原爆が投下され、爆心地近くにあった浦上天主堂など、乱歩の目に留まった切支丹名勝も大きな損害を受け、戦後になってようやく修復されるようになった。

（立教大学大学院生）

図１「南洋の風土を偲ぶ・日向青島の奇勝」絵葉書／表紙（右）、葉書表と裏（左）
葉書表には「（日向青島名所）青島神社境内全景」とあり、青島の紹介文が書かれている。裏には「宮崎市観光記念」「日向青島」「11.1.6」と記念はんこの跡があり、乱歩が一九三六年一月六日に宮崎青島に訪れたことを証明する。

図３ 現在の大浦天主堂
（筆者撮影・2019年夏）

図２「長崎切支丹名勝案内」
（大浦天主堂発行のパンフレット）